

松倉功治 弁護士

Kouji Matsukura



新64期 しんらい総合法律事務所 元高校教師・野球指導者
※

出身は大阪府八尾市です。物心つく頃には王貞治選手に憧れ、プロ野球選手を夢見る野球少年になっていました。小学校の野球部で活動を始めましたが、「エース・4番・キャプテン」を任されていました。

中学校は、大阪教育大学附属天王寺中学校を受験して合格し、同校に進学しました。いよいよ本格的に野球に取り組もうと意気込んでいた矢先、なんと、進学した中学に野球部がありませんでした。さすがに落胆しましたが、最も体力をつけるスポーツをしたいと思い、柔道部に入部しました。柔道では、わずか1年2カ月で黒帯をつける程に上達し、大阪の代表選手にも選ばれ、柔道の名門私学からも勧誘されましたが、野球への思いは一度も途切れることはありませんでした。

高校は、そのまま大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎に進学し、迷いなく野球部に入部しました。1年生春からレギュラーになりましたが、実は、公式戦では3年間で一度も勝てませんでした。しかし、3年間の高校野球において、私の人生を変える恩師との出会いがあり、白球を通じて人としての基礎を叩きこんでもらえたことは間違いありません。一方、野球選手として一つの転機がありました。高校2年生の夏の甲子園予選で、プロ注目でのちに社会人野球の強豪チームに進んだ有名な投手と対戦しました。この投手との対戦が決まってから約2週間、每晚バッティングセンターに通い、貯金を使い果たして、時速140kmのボールを打つ特訓を重ねました。その結果…本番では、その投手の速球を右中間に弾き返し、二塁打を打つことが出来ま

した。この時に手のひらに残った感触が忘れられず、野球をするために大学に進学し、大学では一流の投手ともしっかりと対戦したいと思うようになりました。そして、高校野球が終わった夏に、どうせやるなら日本一のレベルで、しかも私のような実績の無い者でも入部を認めてもらえそうな野球部、すなわち、東京六大学の東大野球部に進むことを決意しました。

しかし、3年生の夏までほとんど野球しかしてこなかったものですから、偏差値40からの闘いです。現役時には全く勝負にならず、浪人生活がスタートしました。予備校に通い、覚悟を決めて勉強をした結果、1年間で偏差値を25上げることができました。しかし、東大には合格できず、2浪に突入しました。朝は新聞配達、夜は閉館まで図書館で勉強という奮闘の日々を過ごしましたが、東大にはご縁が有りませんでした。野球が目的で大学に進学する以上さすがに3浪はできないと思っていたところ、同志社大学硬式野球部が、その前年の明治神宮野球大会で、部員数が30名足らずでありながらも大学日本一に輝いていたことを、入試前に偶々知りました。この野球部だったら、日本一のレベルでありながら、私でも勝負ができるかもしれないと勝手に思い込み、同志社大学も受験し、同硬式野球部にご縁をいただきました。

夢膨らませた大学野球でしたが、現実には非常に厳しいものでした。1年時には、過酷な練習だけではなく、厳しい寮生活に心身疲弊しました。早朝からのグラウンド整備、練習後のボール磨き、先輩分の掃除・洗濯、深夜の自主練習等々、今でも当時の追い詰められた生活を夢に見てしまうほどです。高校時代に甲子園



を経験している者が大半を占め、日本一を目標に掲げる集団ですから、経験値や技術面で、私と他の選手には相当な差があり、精神的にも肉体的にも辛い毎日でした。野球だけの毎日が嫌になり、下積みを終えた2年時には、一度は退部する覚悟も決めました。しかし、当時の監督が、私のような選手の実存価値も認めてくれ、本気で引き留めてくれました。また、特に同期の仲間が支えになってくれ、その後は吹っ切れたように、野球に励むことができました。そして、4年時にはレギュラーに定着し、関西学生野球秋季リーグ戦では首位打者を争うまでの活躍をすることができました。このような結果の背後にも、大学時代の恩師（コーチ）の存在がありました。その恩師は、戦前戦後に同志社でエースを務め、戦中はポケットに硬球を忍ばせて戦闘機に乗り込んだという方でした。選手の試合における詳細なデータを作成してくれたり、記事の切り抜きを配ってくれたり、いつも選手に考える素材を与えてくれました。『野球の優勝旗よりも、人生の優勝旗を獲れ』と常々語っておられたのを忘れることはできません。

今から思えば、私の野球経験で面白いと思えるのは、大阪府予選で1勝もできないようなチームと日本一を目指すチームで野球をできたこと、「エースで4番」と「チームで最も使えない選手」という対極の立場に立てたことだと思います。プロ野球選手になることはできませんでしたが、その夢をゼロにすることなく野球に打ち込み、野球を通じて自分と闘ったという経験が、今も大きな財産となっています。

* * * *

私は、高校・大学時代の2人の恩師から影響を受け、高校教師になって高校野球の指導者になるという道を選びました。両恩師から共通して学んだことは、野球は終局的には自分を磨くための手段であるということ、何事も結果が全てではなくプロセスが重要であるというこ

とです。この点を実践すべく、奈良女子大学附属高校、母校の大阪教育大学附属高校天王寺校舎で監督を務めた後、履正社高校に教諭として着任し、コーチ及び監督を務めました。ここでも多くの出会いに恵まれ、「甲子園」を常に視野に入れている強豪私学の指導のあり方についても勉強することができました。ただ、強豪私学の指導者が中学生のスカウティングに相当なエネルギーを注ぎ、優秀な選手の獲得を競い合っている点には若干の違和感を覚えました。

* * * *

このような私が本気で弁護士を志したのは、履正社高校で初めて3年間担任をした生徒たちを卒業させた時のことです。教壇で、卒業証書とともに、ひとりひとりに私の座右の銘である『精神一到、何事不成』という言葉を書いた色紙を手渡しました。「心一つにして本気になるれば、人間やってできないことは無い。」「今こそ、自分の可能性を信じて、自分と闘うんだ。」と語りながら、私自身がこの言葉を実践する生き方をしなければという思いになりました。

もちろん、司法制度改革によって法科大学院制度が始まり、「多分野の専門性を備えた社会人を法曹に」等と謳われていなければ、法律を勉強したこともない私が、このような挑戦を思いつくこともなかったと思います。ただ、私のような経緯で弁護士という仕事にご縁を頂いた以上、学校やスポーツの現場で必ず役に立って、司法制度改革の成功例といわれるくらいの社会貢献をしたいと考えています。

* * * *

私はつくづく野球と縁の深い人間だと、野球に感謝しています。

弁護士になってからも、大阪弁護士野球団に所属し、素晴らしい先輩・同期と巡り合いました。どこにでも、野球をバカほど愛する人たちがいるもので、嬉しい気持ちになります。まさか自分が弁護士になってから野球の真剣勝負をするこ



とになると思いませんでしたが、現在、日弁連野球全国大会三連覇を目指して、チーム一丸となり頑張っています。

それから、大阪大学硬式野球部の関係者らが、OBだけではなく外部の人材も招聘して、同部を約30年ぶりに神宮（全国大会）に出場させたいという構想を練られ、コーチングスタッフとして声を掛けていただきました。弁護士業務として教育やスポーツの現場に係ることも興味深いことですが、弁護士業務という形ではなく、弁護士として日々磨いている洞察力、分析力、説得・交渉能力を活かして学生をコーチするというのもたいへん意義深いと考えてお請けしました。現場に立っていかなるアイデアが浮かんでくるかは分かりませんが、どうせやるなら、学生野球やクラブ活動のあり方に一石を投じるような取り組みをしたいと考えています。大学生まじりで阪大生がやる野球ですから、選手らが日常取り組んでいる学問とリンクするような野球ができれば面白いと思います。方法論としては、もはや私が手本を示して技術指導ができるものとは思っていません。いわゆる「ソクラテスメソッド」による選手の問答相手となり、選手に自ら発見させる、探究心を湧かせるようなサポートをしたいとイメージしています。

(Interviewer : 相川大輔)
Photo : 武田